

第1回「万葉集・明日香村」を中心とした授業づくりセミナー 概要報告

大西 浩明

- ◇日時 2023年5月27日(土) 10:00~12:00
◇場所 県立万葉文化館周辺
◇参加者 【学生】無量井、松井、吉岡、川田、東、難波、森、井上
【万葉文化館】竹内、井上、阪口
【大学教員】加藤、米田、大西 計14名

- ◇内容 明日香村内のフィールドワーク 「遺構の保存と活用について」
飛鳥京跡苑池 → 飛鳥宮跡 → 飛鳥寺西方遺跡 → 飛鳥寺

1. 飛鳥宮跡苑池

飛鳥宮に隣接し、飛鳥川のそばにある
河岸段丘を巧みに利用したつくり
東アジア（主に新羅）の古代苑池と似ている
朝鮮や中国には、このような苑池に招待する風習があった
→ 当時の国際関係の象徴
ずっと一面田んぼであった
大正時代に見つかった石 → 「ここには何かある」
一人の研究者の言葉から、99年に発掘調査をして全貌が分かる
→ 日本書紀の記述と研究者としてのソマティックマーカー



苑池をのぞむ場所から

2. 飛鳥宮跡

①北の正殿跡

天皇の私的な空間と考えられる
東西24m、南北12mの建物
正殿の周りには人の頭ほどの石で舗装されている
道路を挟んだ北側に全く同じ構造の正殿がもう一棟あった
柱の位置が分かるように整備された
→ こういう平面展示は草刈りが大変
遷都1400年に合わせ、2030年までに整備予定



正殿跡の平面展示

(「飛鳥宮跡活用基本構想」：奈良県)

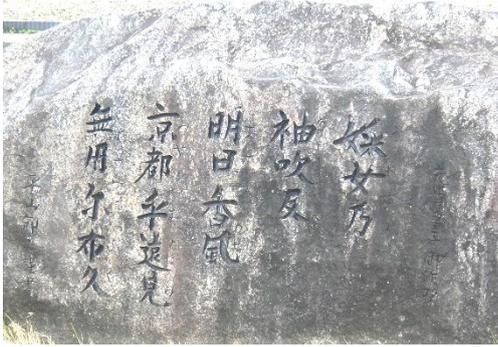
平面展示と立体展示を組み合わせ、当時の飛鳥宮を再現しようとしている
役場もすでに移転した

②井戸跡

1972年に「伝飛鳥板蓋宮跡」として国史跡に指定されたが、2016年に長年の発掘調査の成果を基に、「飛鳥宮跡」に変更された。

→ 4つの宮跡がほぼ同じところに造営されている
井戸が復元されているところも、実際の遺跡は数メートル下に埋め戻されている

③万葉歌碑



「采女の 袖吹きかへす 明日香風
都を遠み いたづらに吹く <志貴皇子>」

藤原京に都が遷ったことを嘆き悲しんでいるが、
飛鳥からは歩いて40分程度

→ 今までは煌びやかだったのに

采女としての役目ももうないのか

心理的に「遠くなってしまった」ことではないか

3. 飛鳥寺西方遺跡



「入鹿の首塚」において

「飛鳥寺西の槻樹（つきのき）の広場」ではないか
（日本書紀の記述から）

中大兄皇子と中臣鎌足が蹴鞠を通して出会った場所

壬申の乱では飛鳥古京の戦いの舞台

蝦夷や隼人などの辺境に住む人々を招いて饗宴を行う場

兵隊の集合場所

ケヤキの木はまさにこの地のシンボルツリーであった

「入鹿の首塚」と言われる石塔は、そんな聖なる木があったことを伝えるためのものではないか
そう言われるようになったのは江戸時代ごろか

遺跡には砂利が敷かれていたが、一部敷かれていない部分があった

その部分がかつてのケヤキの木の長い根が張っていたのではないか

その太さから考えて、かなり大きな木（樹囲3~4m）であったと推測される

4. 飛鳥寺とその周辺



講堂の柱の礎石がそのまま見られる

隣接する来迎寺の中にも

1400年前のものがそのまま見られるのも明日香の魅力

飛鳥寺講堂の柱の礎石

【まとめ】

- ・「よく分からない石造物」ではなく、学術的な裏付けのもとに明日香を教材化することが重要
- ・万葉集だけでなく、古事記、日本書紀も出発点は明日香の地
飛鳥は「日本文学発祥の地」と言えるほどのポテンシャルがある